

## 中学校家庭科における授業研究

智辯学園和歌山中学校：西岡真弓、有田市立箕島中学校：北又寿美  
那智勝浦町立那智中学校：松本年絵、那智勝浦町立下里中学校：浜敬子  
岸和田市立野村中学校：中内昌恵、和歌山大学附属中学校：川嶋径代  
和歌山大学教育学部：村田順子(研究代表)、今村律子、山本奈美、後藤優美子(M2)

### 1. はじめに

本課題は、中学校家庭科教員が授業研究や情報交換を行う場を構築することを目指し、複数の中学校教員と連携し継続的に取り組んできている。本年度は、コロナの影響で予定していた授業見学・研究協議などが中止になるなど、当初の計画通りに研究が進まなかった面もあるが、授業づくりを目的に行った活動を中心に報告をする。

### 2. 活動報告

#### 1) 住生活「住まいの安全」の授業づくり（有田市立箕島中学校）

10月1日（木）検討会：予定されていた2020年度中学校技術・家庭科研究大会・近畿大会（和歌山）は中止となったが、大会の報告書に掲載する学習指導案について北又先生と和歌山大学において検討を行った。授業は、住生活分野の「高齢者の家庭内事故」の内容で、「高齢者の家庭内事故を防ごう～住まいの安全すごろく～」を用いることを前年度に決定していたので、主にすごろくの効果的な使い方について検討を行った。検討した授業案に基づき校内授業研究会で授業を実施することとなった。

11月24日（火）校内授業研究会参加：箕島中学校で行われた校内授業研究会に、学部教員2名と大学院生1名が参加し、授業参観を行った。授業後には、生徒のワークシートを確認しながら協議を行った。

2021年1月に予定されていた校内授業研究会の授業見学はコロナの感染拡大により中止となった。

#### 2) 食生活「中学校家庭科の食生活における教材（ワークシート）の作成」

（岸和田市立野村中学校、智辯学園和歌山中学校）

中学校家庭科の食生活における教材（ワークシート）の作成のために、岸和田市立野村中学校 中内先生と智辯学園和歌山中学校 西岡先生を含むメンバーでグループを構成し、メールや電話での打ち合わせを含め、8月から12月にかけて複数回にわたって検討を重ねた。

作成したワークシートは調理に関する題材を中心として持続可能な生活に関連した内容も含み、おもに発展的な内容として用いることを想定した。題材によっては、生徒の調べ学習や話し合い活動に対応できるような課題も設定した。分担して原案を作成した後、複数の学校で授業に用いることができるような汎用性も考慮し、難易度や内容の妥当性について検討と修正を重ねた。実際の活用はこれからとなるが、生徒の反応なども確認して改良につなげていきたいと考えている。

#### 3) 東牟婁地区の取り組み（那智勝浦町立那智中学校、那智勝浦町立下里中学校）

東牟婁地区では免許外で家庭科を担当している教員が多く、毎年「東牟婁地方中学校技術・家庭科研究会 実技講習会」を実施し、授業づくりに活かせる取り組み、及び情報交換を行っている。大学からはその年のテーマに該当する分野の教員が参加し、助言等を行っている。今年度は、コロナの影響で実技講習会が開催されなかったが、東牟婁地区の教員4名でセキスイハイム新宮の展示場見学と、三重県で熊野材を利用した家具造り工房の見学を行った。

## 4) 住生活分野の授業づくりと実践

家庭科の分野の中でも住生活分野は教員の苦手意識が強いというえに、公開されている指導案や教材が少ないことが長年の課題となっている。そこで、住生活分野の教材づくりを行い、智辯学園和歌山中学校において授業実践をさせて頂いた。具体的内容については次項の通りである。

## 3. 住生活分野の教材開発（智辯学園和歌山中学校）

## 1) 授業の構想

本課題は、大学院生の修士論文の一環として企画・実践を行った。実践校の智辯学園和歌山中学校では、高等学校で使用される「家庭基礎」で授業を行っているため、中学校での授業実践ではあるが教材づくりは主に高等学校で学ぶ内容とした。生徒が主体的に住まう力を身につけることを目的に、生涯を見通して、より安全・安心な住環境をつくるための知識を身につけ、ライフステージに応じた住まい方の工夫を考えられるよう、一連の授業のつながりを重視して教材開発を行った。

まず、住生活分野で学ぶべき内容の検討を行ったところ、8時間の授業時数が必要であることが明らかとなった。そこで、全8時間がひとまとまりとなるよう意識しながら授業を構想し、各授業回の学習指導案およびワークシートを作成した。各回の授業実践に至るまでに、智辯学園和歌山中学校 西岡先生に逐次助言を頂き、授業案、ワークシートの検討を重ねた。生徒の実態を踏まえた助言をもとに、高等学校で学ぶ内容が中心ではあるが、小・中学校での学びの復習的内容を適宜取り入れ、中学生にも理解しやすく、また生活の中での実践に活かせるよう授業内容を工夫した。全8回の授業の概要を表1に示す。

表1 授業の概要

	題材	目標
1	住いの必要性を知ろう	<ul style="list-style-type: none"> <li>・住まいの役割について理解する</li> <li>・住まいの安心・安全について、自分たちの暮らしを守るための方法を知る</li> <li>・日本の伝統的な住まい方、洋式化した現在の暮らしを知ることにより、より良い暮らしをするために住まい方を選択することに気付く</li> </ul>
2	間取りとライフスタイルを考えよう	<ul style="list-style-type: none"> <li>・住空間の役割について理解する</li> <li>・簡単な平面図から暮らしのイメージができるように、平面図記号について知る</li> <li>・住む人のライフスタイルを考慮しながら、適した間取りを考える</li> </ul>
3	共に生きる 住まい・まちとは？①	<ul style="list-style-type: none"> <li>・バリアフリーとユニバーサルデザインの 違いについて理解する</li> <li>・家族以外の人と共に暮らす住まい方を選択する理由について知る</li> <li>・より安心した暮らしをするための必要な環境について考える</li> </ul>
4	共に生きる 住まい・まちとは？②	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実験から、音の性質や響き方を体感し、音に対する感じ方は人によって異なることを理解する</li> <li>・自分だけでなく、他者にとっても快適な生活をするための防音の工夫を考える</li> </ul>
5	これからの住まいを考える①	<ul style="list-style-type: none"> <li>・住宅寿命を長くすることの利点を理解する</li> <li>・住まいに長期的に暮らすための日常的な手入れの方法について考える</li> </ul>
6	これからの住まいを考える②	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日常生活に必要な住環境について理解する</li> <li>・自分が住んでいるまちを振り返り、より良いまちにするための改善点や改善方法について考える</li> </ul>
7	住まい選びの視点とは① 1人暮らし編	<ul style="list-style-type: none"> <li>・住まい選びを通して自らの住要求を知る</li> <li>・実際に一人暮らしの賃貸物件を選ぶことを通して、住まいの整え方を知る</li> </ul>
8	住まい選びの視点とは② 家族暮らし編	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ライフステージに応じた住要求を理解する</li> <li>・集合住宅と戸建て住宅の特徴、賃貸住宅と持ち家の特徴など住まい選びの基礎となる知識を身に付ける</li> </ul>

## 2) 授業実践

授業実践は2020年8月5日～10月21日の期間に、智辯学園和歌山中学校3年生（5クラス、217名）を対象に、西岡先生と大学院生がクラスを分担して実施した。各回の授業前には両名で授業の流れを検討・確認を行い、授業中の生徒の様子やワークシートへの取り組みを観察し、授業後に教材の改善点について意見交換を行った。授業期間中、大学教員が授業参観を1回行った。

## 3) 教材の効果と課題

教材の効果は、生徒の各回の授業目標の達成度についての自己評価と、授業で気付いたことや分かったことなどの記述内容の分析により行った。授業に関する記述欄は、授業中の発言や様子からだけでは分からない生徒の理解の仕方や興味を持った内容についての把握が可能になるとの西岡先生からのアドバイスを受けて2回目以降に設けた。また、住生活分野の授業に入る直前と、全ての授業が終

了した4週間後にアンケートを生徒に対して行い、授業前の住生活分野に関する興味・関心および基礎知識、授業後の興味・関心の変化および知識の定着度について把握した。

その結果、生徒の自己評価は全体的に高い評価をしており、授業目標が達成できたと考えている生徒が大多数であることが分かった。記述内容の分析結果については紙幅の関係で詳細は省くが、授業を受けてこれまで住居分野について知らなかった知識を得たり、ワークシートに設定した作業を通して住まいや住まい方について学んだ知識をもとに自分なりに考えたり、新たな視点に気付いたりしている様子が伺えた。全8回の授業をまとまりのあるものとして構想したことで、各回の授業で学んだ知識を関連づけて考えることができている生徒もいた。

また、事前・事後アンケート結果より、授業前に比べて住生活分野に対する興味・関心が高まり、将来に役に立つと考える生徒が増加していることが把握できた。しかしながら、住生活分野に対する意識として「難しい」と考える生徒が増加していることも明らかとなった。これについては、各回の授業後の生徒の自己評価が高かったことから授業そのものへの理解が難しかったのではなく、住生活について考える際には、住まいだけではなく、そこに住む人の状態や地域のことなど広く考える必要があることに気付いたからだと推察される。住生活は衣生活・食生活のように実際に経験できる機会が少ないうえ、自身の行動の結果や影響がすぐに実感できるわけではない。そのため、いかに実感を持たせた理解につなげられるかが課題であり、今回の実践でも残された課題といえる。

授業者の大学院生は、一連の授業の組み立てをしっかりと考えたことで、流れのある授業を実施できたと自己評価していた。授業者が授業の意図を明確することが、生徒の理解度にも影響したと考えられる。

#### 4) 活動の成果

長年共同研究をしている智辯学園和歌山中学校西岡先生のご尽力で、年間の授業計画を調整して住生活分野で8時間の授業実践の機会を設けて頂いた。また、授業を分担して実施して頂いたことにより授業の構想から実施に至るまで、具体的な助言を頂いたことは非常に有意義なことであった。生徒の実態に即した授業を実践できたことで、生徒の自己評価も高いものとなり、教材の効果があつたと考えられる。加えて、大学院生の修士論文の内容が充実したものとなっただけではなく、来年度より家庭科教員として教壇に立つ予定の大学院生に貴重な経験をさせて頂いた。

#### 4. おわりに

本共同研究は、和歌山県下および大阪府下の複数の中学校と連携して実施した。本年度は、コロナの影響もあり予定していた活動の実施が困難だった面もあるが、共同研究者の先生方のご協力のおかげで、充実した活動を行うことができた。来年度以降もコロナの影響が残ると考えられるが、情報交換や家庭科の各分野の授業内容の検討を行ったりして家庭科の授業の充実を図っていければと考えている。また、機会を頂いて実際の授業を学生に見せたりすることで、研究の成果を学生に還元していきたいと考えている。